親子の葛藤はなぜ起こるのか

―家庭教育のあり方が子どもの内面に与える影響―

06DE164T 　森田　美帆子

第一章　本研究の問題意識と目的

1.1　問題の所在

　近年政府の施策にも表れているように、「子どもが非行や問題行動に走る原因は、家庭での子育てに原因がある」という認識が世間一般の理解となっている。90年代半ばより顕著に増加した、家庭教育のハウツーを語る雑誌記事や書籍などのマスメディアにおいても、結果的に家庭教育の改善・向上を目指すベクトルへと合流している。

　その発端となったきっかけとして、1997年春に神戸で起きた連続児童殺傷事件（通称「酒鬼薔薇事件」）が挙げられる。親にとって「普通の子」「自分の子」「犯罪を起こす子」の境目が明瞭でなくなった。そしてどんなに愛情を持って育ててきたつもりでも、一度子どもが非行や問題行動を起こせば、世間の目は冷たいことを物語っていた。

　世間の関心に合わせて90年代後半以降、教育基本法に家庭教育に関する条文が盛り込まれるなど、家庭教育に対する政府的介入が強力に推進されている。1998年、当時の橋本龍太郎首相による「心の教育」の必要性を謳った中央教育審議会答申がまとめられた。そしてこの答申後、文部科学省は厚生労働省と提携して、「家庭教育手帳」「家庭教育ノート」「家庭教育ビデオ」の作成・配布に取り組みはじめる。

　こうした中で、現在日本の子育ての終着点は、80年代以前におけるような受験学力に特化したものではなくなった。それよりも、意欲や関心、人間関係能力など十分な「社会化」を促すことが、家庭教育への強い期待・圧力となっている。

　しかし本来、大多数の親は子どもに健全に育ってほしいと願っている。それでも子どもは思う通りには育たない。子育てに熱心であればあるほど「子育ての責任は家庭にある」という呪縛は親にとってプレッシャーに他ならない。しかし「専業主婦だから子育ては順調」「家族が一緒に御飯食べているから大丈夫」といった理論はもはや形骸化している。そうした中で、親子の葛藤はなぜ起こるのか、親は我が子に対しどのように関わっていくのが望ましいのかを考えることは、今後に向けて十分な意義を持つと考える。

1.2　非行化原因に関する総合的研究調査の結果から

　子どもの非行や逸脱行動は、親子関係の葛藤をうかがわせるものとして非常に重要な研究対象となることから、次の調査について触れたい。平成11年内閣府総務庁青少年対策本部が行った「非行原因に関する総合的研究調査(第三回)」の結果は、非行化要因の一つとして親子関係の問題を認めている。

　この調査は昭和52、63年に続き、第三回調査が平成10年9月に行われた。一般少年9620名(全国15都府県の公立小学生・中学生・高等学校生　計90校)と非行少年1270名(補導少年637名、少年鑑別所在所少年633名の合計)とその保護者2061名を対象とした大規模質問紙調査である。

　非行化原因をめぐる20年間の変化について、全体的な傾向は以下の通りである。

一般群についてはここ20年で大きな変化は見られないが、学校への不適応感や不良行為体験が増加するなど好ましくない方に向かっている要因も見られる。全体にみて子どもの世界は、決して良い方向に向かっているとは言えない。一方、非行化への要因(非行群で比較的多い状況)の分野としては，親子関係、日常生活、学校関係、性格面等、ほぼ全分野にわたっている。

1.3 研究の目的

本研究では、どのような家庭教育のあり方が子どもの内面に影響を与えていくのかを解明することを目的とする。結論部では、親は我が子に対しどのように関わっていくのが望ましいのかについても考察していきたい。

決して一部の親が子どもに対する努力や配慮を怠っていると責任を問いただすことが目的ではない。大半の親が子どもに対して自らが最善と考え実行可能なだけの教育や配慮を行っているにも関わらず、その結果に相違があるのはなぜだろうか。本分析では家庭における子育ての質的なあり方、日常的な親の行動が、家庭教育の結果として子どもにどのように受け取られ、子どもの内実にどのような影響を与えているかを追求したい。

1.4　先行研究（略）

1.5　仮説

従来、家族社会学研究は親調査に依拠したものがほとんどであり、肝心の子どもの意識まで十分な分析がされてきたとは言えない。前述した畠中・木村(2006)や佐々木(2009)の研究は、子どもの内面を量的分析した数少ない論文である。しかしそれらの研究も父母いずれかの研究であり、親子関係の限られた側面に限定されていることから、本研究では以下の仮説に基づき分析を行う。

【作業仮説】

1)親による子どもに対する関心、子育てに対する考え方、親自身の普段の行いなど、それらがどのように子どもに伝わっているかが、親子の関係性に影響を及ぼす。また父親と母親、子どもが男児か女児かによって、差異がみられるのかどうかについても検証する。

2)両親との関係や親の叱り方が、親に叱られた時の子どもの気持ちに影響を及ぼす。

3)両親との関係、家庭内の居心地、また親に逆らうことがためらわれる環境が、子どもの精神的ストレスに影響を及ぼす。

第二章　分析に用いるデータと変数

　本研究では二次分析にあたり、兵庫教育大学教育・社会調査研究センター教育データアーカイブサービス (JEDI)から「親子調査2006」(調査主体: 兵庫教育大学教育・社会調査研究センター、調査実施:中央調査社)の個票データの提供を受けた。本調査は、2006年6月～7月にかけて行われ、個別面接聴取法(母子)と留置記入依頼法(父親)による。抽出には住民基本台帳が用いられ、地域差を考慮して地方と人口規模別の層化二段無作為抽出法による。

　分析対象は、全国の中学1年生～高校3年生相当の年齢の子どもを持つ世帯の父母子3者803世帯2409名(中高生803名、父親803名、母親803名)である。小学生については、まだ反抗期を迎えず、概ね親子関係への問題が表面化する以前であることを考慮し、今回の分析からは除外した。

第三章　分析結果

3.1　作業仮説1)の分析結果

　作業仮説1)では親子関係を規定する要因を明らかにする。

まず基本的分布として、次の2つの棒グラフは作業仮説1)の被説明変数、「父親との関係」の男女クロス集計結果である。



N=553　平均値2.3(最小値1.0　最大値3.0)　標準偏差0.6

　図1から、中高生と父親との関係はおおむね良好な様子だが、「よくない」とは断定しなくとも、「どちらかといえば良好」と「とても良好」の間にはどのような説明変数の働きがあるのか。男女ともにほぼ半数ずつであるその比率の背景を、後に検討したい。

前章に載せた表1から、ほとんどの項目で2段階、3段階の回答に幅広く分布していることを前提として、親子関係を規定する要因を明らかにするべく男女別に重回帰分析を行った。

表2　中高生と父親の関係の規定因についての重回帰分析（男子）

独立変数　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　β　　　　　　ｒ

　学年(中高生) 　 　　　　　　　 .06 .03

　父親は普段子どもに言うことを実行しているか(中高生)　 .12\* .13

　子どもについてよく知っているか(父親) 　　 .01 .01

　父親の方針―子どものしたいことを自由にさせる(父親)　 .06 .05

　父親の意識―父親の役割は稼ぎだけではない(父親)　　 -.01 -.04

　父親帰宅時間(父親) -.07 -.11

父親との会話頻度(中高生) .50\*\* .50

母親との関係(中高生) -.07 -.06

親に逆らうことは許されないと思う(中高生) -.07 -.08

R²=.26　 N=243 　　\*\*p<.01　\*p<.05 　 β:標準偏回帰係数　　ｒ:相関係数

表3　中高生と父親の関係の規定因についての重回帰分析（女子）

独立変数　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 β　　　　　　　ｒ

　学年(中高生) 　 　　　　　　　 .04 .02

　父親は普段子どもに言うことを実行しているか(中高生)　 .13\* .24

　子どもについてよく知っているか(父親) 　　 .05 .06

　父親の方針―子どものしたいことを自由にさせる(父親)　 -.01 -.02

　父親の意識―父親の役割は稼ぎだけではない(父親)　　 -.09 -.06

　父親帰宅時間(父親) .01 .01

父親との会話頻度(中高生) .54\*\* .56

母親との関係(中高生) .06 .05

親に逆らうことは許されないと思う(中高生) .00 -.03

R²=.32　 N=234 　　\*\*p<.01　\*p<.05 　 β:標準偏回帰係数　　ｒ:相関係数

なお要約のため、説明変数同士の相関行列についてここでは割愛し、得られた知見のみ後の章で掲載するものとする。

　表2・表3の重回帰分析結果より、中高生と父親の関係を規定する要因として1%水準で有意な関連が認められたのは、男女共通で「父親との会話頻度」が最も大きく(男子:β=.50、女子:β=.54)、次いで「父親は普段子どもに言うことを実行しているか」(男子β=.12、女子β=.13)であった。その他の父親帰宅時間や父親がどれだけ子どものことを知っているか、父親の育児方針などは、仮説に反して有意な影響を及ぼしていない。その他の項目では、男女間でも細かい違いがみられた。

　また父親同様に、母親と子どもの関係性についてもロジスティック回帰分析を行った。

要約のため結果の詳細は本章では割愛し、後の章で得られた知見を載せるものとする。

3.2　作業仮説2)の分析結果

作業仮説2)では親に叱られた時の子どもの感情を規定する要因を明らかにする。まず基本的分布として、次の棒グラフは作業仮説2)の被説明変数、中高生による「母親に叱られた時に思うこと」の男女クロス集計結果である。



N=542　平均値1.7(最小値1.0　最大値2.0)　標準偏差0.4

図3から、最近の中高生は父親から叱られた時に反抗的な意思を持つことの方が少なく、むしろ素直に受け入れているケースの方が多い。

　その上でも、親に叱られた時に感じる反抗心と肯定心を左右している要因は何なのか。それを明らかにすることが作業仮説2)の課題である

　前章に載せた表12から、ほとんどの項目で2段階、3段階の回答に幅広く分布していることを前提として、親に叱られた時の子どもの感情を規定する要因を明らかにするべくロジスティック回帰分析を行った。要約のためここでは母親のみ掲載し、父親については後の章にて得られた知見のみをまとめる。

表16　母親に叱られた時の子どもの気持ちの規定因についてのロジスティック回帰分析(男子)

独立変数　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　B　　　　 Exp(B)

　学年(中高生) 　 　　　　　　　 　.05　　　　 1.05

　子どもについてよく知っているか(母親) 　　　 　 .09　　　 　1.09

　母親との会話頻度(中高生) .28　　 　 1.32

母親との関係(中高生) .48　　　 　　1.05

子どもに腹を立てた場合―大声で怒鳴る(母親) -.50　　　 .60

子どもに腹を立てた場合―静かに言ってきかせる(母親)　 .20　　　　　 1.22

母親は普段子どもに言うことを実行しているか(中高生) 1.07\*\*　　 　 2.91

NagelkerkeR²=.10　 　df=1 N=257

　\*\*p<.01　\*p<.05 　　　B:偏回帰係数　　　　　 Exp(B):偏回帰指数(オッズ比)

表17　母親に叱られた時の子どもの気持ちの規定因についてのロジスティック回帰分析(女子)

独立変数　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　B　　　　 Exp(B)

　学年(中高生) 　 　　　　　　　 　-.16　　　　 .85

　子どもについてよく知っているか(母親) 　　　 　 -.08　　　 　.92

　母親との会話頻度(中高生) .46　　 　 1.58

母親との関係(中高生) .32　　　　　1.38

子どもに腹を立てた場合―大声で怒鳴る(母親) -.51 　　　 .60

子どもに腹を立てた場合―静かに言ってきかせる(母親)　 -.13　　　　　 .88

母親は普段子どもに言うことを実行しているか(中高生) 1.32\*\*　　　 3.74

NagelkerkeR²=.10　 　df=1 N=247

　\*\*p<.01　\*p<.05 　　　B:偏回帰係数　　　　　 Exp(B):偏回帰指数(オッズ比)

なお要約のため、説明変数同士の相関行列についてここでは割愛し、得られた知見のみ後の章で掲載するものとする。

　表16・表17 のロジスティック回帰分析結果より、母親に叱られた時の中高生の感情を支配する要因として、1%水準で有意な関連が認められたのは、「母親は普段子どもに言うことを実行しているか」が男子でB=1.07、女子でB=1.32と唯一の有意な結果となった。

　反対に、父親同様に「大声で怒鳴る」や「口をきかない」などといった、親による”叱り方”は子どもの気持ちに有意な影響を及ぼしていないことも明らかになった。

これらの結果から、普段の親の行いに共感できるかという観点で子どもの感情は動かされているという事実は見て見ぬふりできない。

3.3　作業仮説3)の分析結果

作業仮説3)では中高生の精神的ストレス要因と、中高生にとって家庭の雰囲気を左右している要因を明らかにする

・・・・(中略)

第四章　結論

　今回の分析結果でから浮かび上がったのは、一般家庭における子育ての質的なあり方、日常的な親の行動が、子どもにどう受け取られているかが、いかに親子関係や子どもの内面に影響を及ぼしているかという問題である。これまでの家族社会学では父母子3者の互いに関する量的研究はほとんどなされてこなかったことから、今回得られた新たな知見は非常に有用なデータと考えている。それらを元に本章では、親は我が子に対しどのように関わっていくのが望ましいのかを考察していきたい。

今回の分析結果から、まず親子関係を規定する要因について、子どもにとって父親に求めるものと、母親に求めるものは根本的に異なることを主張したい。父親と子どもの関係は、会話頻度や父親は普段子どもに言っていることを実行しているかといった、いわば目に見える父親行動に影響を受けている。これについて私の見解は、先行研究で佐々木(2009)が示した「父親は子ども接する時間が母親に比べて一般的に少ないため、子どもについてどう思っているかという内面的意識は子どもに伝わりにくいのではないか、そのため意識よりも行動化された指標の方が子どもに有意な影響を及ぼす。」という見解と全く一致である。反対に母親と子どもの関係は、母親が子どもについてどれだけ知っているかや、「子どものためならどんな苦労もいとわない」といったやや極端ともいえる意見にも賛同できるかなど、父親に比べより内面的な子どもへの関心度合い(誤解を恐れずに言えば「母性愛」)に規定されている。ここで問題となるのは、それら親の無意識が有意に子どもの側に伝わっていることで・・・・

参考文献

浅野和生. 2010. 『台湾の歴史と日台関係　―古代から馬英九政権まで』早稲田出版.

稲月正. 2006. 「北九州市と板橋市（台湾）における外国人労働者の受け入れについての意識　―受け入れの「好ましさ」とその規定要因」『社会分析』33: 41-59. 日本社会分析学会.

上ノ原秀晃. 2013. 「東アジアにおけるトランスナショナル・アイデンティティ　―EASS2008データを用いた国際比較」『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集』13 (JGSS Research Series No.10): 93-104. 大阪商業大学.

大槻茂美. 2007. 「外国人の増加に対する日本人の見解　―JGSS-2003データを用いて」『社会学論考』28: 1-25. 東京都立大学社会学研究会.

★書式

　横42×縦38字

　余白　上下20 左右25ミリ

　本文は明朝体フォント11ポイント

　論文タイトル、節タイトルのみMSゴシック、冒頭部をこの見本に合わせる。

　　論文タイトルは16ポイント、副題のポイントは変えてもよい。

　　節タイトルなど太字にせずゴシック。

　文献リストは、必ず、著者名と発行年を最初に。上記の形式にする。２行目以降は冒頭を空白２文字あける

　グラフの模様は、白黒印刷で分かるように注意。図表は適切な位置に挿入。

　章と節の前のみ空白行を入れる。それ以外に、余計な空白行は入れないこと。

　ページ数を必ず中央下に付けること。